

福田寺だより

発行 55

神奈川県小田原市飯田岡二五七27

飯田山 矩田 田 圭守 36

住職 橋本 尚 信 伍

特集

本堂新築工事進行

特

木取り・彫刻の段階

本年四月から本格的に始まりました本堂新築工事は、夏の暑さと共に一段と熱がはいっております。

服部正次、克美、親子の行きの合った仕事で、順調に木取りが進んでおります。柱になる樺材に一寸とした不都合が見つかるのと取り替えるといった具合に、材料の選定、遣い方に、随分と気をつかっていただいております。

又、七月から、彫刻師による虹梁

等への彫刻作業が、約一ヵ月にわたって行われました。彫刻師は、平塚の渡辺豊雲氏で、息子の明男氏と親子で仕事に当たっていただきました。渡辺氏は、二宮・等覚院、大磯・東光院の彫刻も担当した人で、その腕は西湘一円で右に出る人がいないと言われる程の人です。できればえを見ていただければ分かりますが、「さすが」の一言に尽きます。

行事予定

九月二十日〜二十六日

秋のお彼岸会

彼岸とは、生死流転の此岸から涅槃の彼岸に至るといふ「到彼岸」のことで、インドのことばのパラミター（波羅密多）を訳したものです。このように、彼岸は仏道を修行し成就することを本来の意味としていますが、一般に家庭では彼岸だんごやおはぎを作って仏壇に供え、人々は先祖の墓に詣で、先祖供養を行います。

我が国では丁度春分と秋分に重なり、昼夜の長さが同じで、太陽が真東から昇り真西に沈む時でもあり、時節を示す名称にも用いられるようになりました。

「暑さ寒さも彼岸まで」 良い季節になります。どうぞ皆様でお参り下さい。

福田寺の舟が寺を出る？

— 住職もビックリ！ —

前号で福田寺の舟を紹介したばかりの矢先、住職も知らないうちに、舟はもともと自分達のものであるという一部地域住民の人々が、舟を移

転する計画を話し合っていたことがわかり、住職もビックリしましたが、当事者と話し合ううちに、本堂新築にともない舟はどうなるのだろうか心配した人が、寺に相談せず早合点した結果とわかり無事解決致しました。

事の次第を以下時を追って経過説明致しますと・・・

◇七月の末頃

飯田神社関係の方が来て、何の説明もせず舟の長さ等を測って帰る。

この時点では特に気にもせず、何かの参考にするのだろうかと思っただけのところ・・・

◇八月八日

突然、富水小学校の校長先生が訪れ、「飯中の自治会関係の人の紹介で福田寺の舟を学校に寄付してくれらるそうで、すでに職員とも準備を進めていますが、とりあえず実物を拝見させて下さい」とのこと。これには住職もビックリして、「そのような話は、住職自身全然聞いておりませんし、又話した事ありません、何かの間違いでしょう。舟は本堂新築後もきちんと保管できるように棟梁にもお願いしてある次第です」と伝

えましたら、校長先生は、「そういうことでしたら結構なことです。どうぞ寺の方針で保管をお願い致します。」と云って帰られました。

◇八月十六日

財産組合長が来寺、「8月20日に数名で寺に話し合いに伺う」とのこと。「内容は？」と聞いたところ、「舟の事でもともと財産組合の所有であったようなので、考えてもらえないか・・・」とのこと。

(住職はこの時点で初めて、舟の事について他のところで話し合われていることを知る。)

「寺として舟を他へ移す予定は全くないし、本堂新築後も寺で保管するつもりでいるので、話し合う余地もないと思うが、日程を決めてしまっただようだし、一度寺の意向も聞いておいてもらう必要もあるので、どうぞおいでください。」と答えておきました。

◇八月十八日

財産組合長が来寺、「諸般の事情により、当分の間舟の話は保留にして欲しいので、8月20日の会合も取り止めます。」とのこと・

◇八月二十日

財産組合長より電話にて、「明晩（8月21日）財産組合の役員四名で相談に伺う」とのこと・

（一昨日、当分の間保留といていながら、急にどうしたのか合点が行かないが、とにかく話を聞かないと分からないので承諾する）

◇八月二十一日

財産組合の役員四名（組合長 香川肇氏、委員 高橋淳氏、同 山崎政男氏、同 山崎明氏）との会合内容を以下要約して述べます。

財産組合長個人の意見として、「舟の所有権を財産組合のものであると認めて欲しい、その上で保管方法を検討したい。」との要望でした。

これに対し、住職の意見として以下のように答えました。

(1.) 以前の所有者が誰であったのかははっきりしない。おそらく村持のようなものであったろうと推定されるが、証明するものは何もなく、又現在の財産組合との関連が定かでない。もし仮に以前の所有者がはっきりしたとしても、その者に所有権が有るということではない。

(2.) 福田寺に保管された時のいきさつがはっきりしない。おそらく大きな物なので、保管場所に困って寺に頼んだものと思われる。

(3.) もし福田寺で保管していなかったら、舟はすでに処分されていたであろう可能性が強い。

(4.) 八十年近く、何らの意思表示もなく、今更元の所有者であるらしいというだけで、所有権を主張する動機が理解できない。

(5.) 多くの見学者（小学生、郷土史家等）に対して説明、対応してきた寺の姿勢（接待）以上の対策を検討している様子がみられない

(6.) 各種の書物に、既に掲載されている以上、これを変更するような無責任な態度は、住職として執れない。

(7.) 寺として今後も、ずっと保管して行くつもりで、既に棟梁にも本堂新築後も保管できるよう依頼してある。

以上のような寺側の意向を説明したところ、三人の委員の方には充分納得していただいだけ、何ら問題にすることは無かったのではないかという結論に至りました。

いずれにせよ、今回の件は本堂新築の話題から、舟の始末をどうするかということになり、昔の話におよび今回の持ちかけに至ったのとこのように寺側も前回の「福田寺だ

より「で舟の紹介の最後のところで寺での保管方法を考えて欲しい旨を書いたので、早合点された人が居るのだと思うと、多くの人が福田寺のことを思ってくれているのだと実感し、たいへん有り難く感ずる次第です。

さて、会合での結論と致しまして組合長を含め、四人の役員の皆様は寺での保管をよろしく頼む、と言われましたので、寺としても今まで以上に注意をして保管にあたることを伝えて、解散いたしました。

以上、真夏の夢物語でしたが、檀家の皆様には、福田寺として本堂新築後も、舟はきちんと保管してゆくのだということ、改めてご認識、ご承知願いたいと思います。

銅板寄進のお願い

本堂新築に際し、屋根に葺く銅板に祈願内容とお名前を書いて、祈禱致します。一枚二千円です。寺にお申し込みください。

おしえ

密山 弘教 と三ロウ 三言世采の意味

密教とは秘密仏教の略称である。海外の学者は、金剛乗とかタントラ仏教と称する。我が国で密教と云う場合、シナを経て伝えられ日本的に組織化されて展開した、真言密教、

あるいは天台密教を指す。長いあいだ密教は、仏教の中で常に異端視され続けてきた。それはヨーロッパの初期の仏教研究の主流が、原始仏教の中に合理性を求め、その流れから逸れるものを白眼視し、蔑視した誤りによる。

二十世紀に入って、インドで密教の原典研究が活発化するとともに、ヨーロッパに於ける仏教研究がようやく原始仏教至上主義を脱却し、大乘仏教がもつ宗教的、儀礼的、神秘的な性格を仏教の本質として改めて認識しはじめてきた。それとともに密教に対する偏見はほとんど消滅し

今日、密教の複合性から生み出された思想は、新しい世界の思想的指標として見直されようとしている。

さて我が国に於いて密教は、平安時代に隆盛を極め、その後の日本社会に完全に土着化したのであるが、その原因は日本に伝えられた仏教が大乗仏教、それも爛熟期のもので、密教的な要素を多分に内蔵していたことによると考えられる。

密教が日本の文化に与えた影響は大きく、宗教面だけでなく文学、美術、芸能などの領域にも及んでいる。もし密教の伝来がなければ、我が国の文化はいちじるしく違った貧弱な様相を呈していたであろう。

一千年以上にわたる日本密教の伝統の礎を築いた、弘法大師（空海）の思想にも、いつれふれてみたいと思います。